# ローザ
# ルクセンブルク
# 論集

酒井角三郎

滝田修

清水多吉

向山景一

川田洋

浜田泰三

南成四

序……酒井角三郎 | 5

1 若きローザの思想と行動・滝田　修 | 11—56

2 修正主義に抗して

1 修正主義論争・清水多吉 | 57—73

2 ローザの立場・滝田　修 | 74—98

## 3 主体と組織

1 ローザの社会主義運動論・滝田　修 | 99—140
2 ローザ・ルクセンブルクへの視点・川田　洋 | 141—161

## 4 ローザ「蓄積論」の現代的意義

1 「蓄積論」の位置と方法・向山景一 | 166—216
2 帝国主義論としての「資本蓄積論」・向山景一 | 217—260

## 5 ドイツ革命の悲劇

1 ローザ国際主義の陥穽・滝田　修 | 261—312

2 ドイツ革命の悲劇・浜田泰三 | 313—328

## 6 「ローザ批判」の批判

1 ローザ・ルクセンブルクと社会主義・酒井角三郎 | 329—345

2 ルカーチのローザ・ルクセンブルク論・南　成四 | 346—356

# 序

酒井　角三郎

いま、ローザ・ルクセンブルクの思想が全面的に紹介され、再評価されようとしていることは、日本の革命思想のあたらしい展開のために意義深いことだと思う。

日本では大正末から昭和初めにかけてローザのおもな著作が翻訳された。しかしその後、経済学関係の著書を除いて、彼女の一方の本領である政治論は長く姿を消していた。図書館でようやく読むことができても、それは古い文体の訳のうえに大切な所に伏字が多くて読みづらいものだった。三〇年以上もの間ローザの政治論が出版されなかったということは、その間に繰り返し書かれた彼女の伝記や一般のマルクス主義文献の盛行と比べて不思議な対照であった。大正末には日本の革命思想はまだ幾分かの自由を残していたようである。しかしやがて「スターリン主義」の確立と平行して、レーニンと対立した「誤れるローザ」は葬り去られた。

もっとも、美しい心情、革命的情熱と実践につらぬかれた彼女の生涯を語るためのたくさんの伝記が書かれたが「……にもかかわらず彼女は多くの誤りをおかした。それを克服するもの

はレーニンの思想である。」というきまり文句がいつもついてまわった。しかもその一方的評価の正否をわれわれが判断しようにもローザの重要な論文は出版されないままだった。いわばローザは翼をもぎとられた姿でだけわれわれに紹介されていたのである。われわれの目が再びローザの思想全体に開かれるためには、スターリン批判と安保闘争を通過する必要があった。

ローザは良きにつけ、悪しきにつけ、いつもレーニンと対比されてきた。それは同時代に生きた二人の優れた革命家が、しかも互いに譲らない重要な対立点をもっていたことから、ほとんど因縁的に避けられないことであった。しかしこのような「比較」という見方は彼らについての評価の上で限界をもっている。つまり二人の相違点において各々が一面的にとらえられ、ローザそのひと、あるいはレーニンそのひとが全体として理解されにくい。本当は彼らはたくさんの対立点といっしょに共通のものを多くもち、互いに相手を高く評価し合っていたのである。ただこのような限界に気をつければ、この視点は彼らの特色的な側面をとらえる糸口を与えるであろう。

レーニンとローザを比較して気のつくことは、二人の思考法の違いである。たとえばレーニンはこんな考え方をする。「現在『何をなすべきか』を論争している人々がおかしている根本的な誤りは、彼らが特定の歴史的事情との関連から、わが党の発展におけるいまではもうとっくに過ぎ去った特定の時期との関連から、この著作をまったく切りはなす点にある」と。ローザの理論はこのような特定の歴史的状況との関連を要求することは少ないように見える。彼女は一般により普遍的な原理、精神の問題として語るのである。それに比べればレーニンは相対的に特殊的時点に関連する政治現象とそれに対する技術として論ずる。

このような思考法の違いは二人の帝国主義論の差によくあらわれている。十九世紀末の資本主義はマルクスの時代にはなかった諸現象を生じてきた。そこに資本主義の根本的変化を主張するベルンシュタインらの修正主義が生まれた。ロシアにおけるレーニンも、ドイツのローザもそれに対してマルクス主義の正統的立場を守るために闘った。しかし現実の諸現象とそれを説明する原理としてのマルクスの資本論との乖離を説明する必要がある。その場合レーニンの『帝国主義論』は原理には手をふれずに、現実と原理の距離を帝国主義段階という原理とは別の次元の論理を導入することによってうめようとした。『社会改良か革命か』によって修正主義論争のチャンピオンとなったローザは、さらに『資本蓄積論』では資本論の原理を問題とし、それを訂正することによって現実を説明しようとした。資本主義が原理として蓄積の不可欠条件として前資本主義部分を必要とするというローザの説は誤っているというのが学者の定説である。しかし仮りにそうだとしても現実には資本主義は常に後進的部分からの収奪による蓄積を進めてきたことも事実である。『経済学入門』を見るとローザはその現実の理論化を通じて世界経済論の体系の建設を考えていたことがわかる。マルクスが意図しながら実現しなかったこの体系によって、ローザはインターナショナリズムの理論的基礎を与えようとしていた。しかしレーニン以後ローザの経済学体系はその意図までが否定された。そうすることによって人は赤子を産湯と一緒に流してしまったのではないだろうか。

レーニンのより国民経済論的思考は民族問題を通じてスターリンの一国社会主義の理論的基礎となっている。その他の対立点、組織論、農業問題、プロレタリア独裁論などでもレーニンの理論はスターリン主義の重要な基盤である。レーニンの理論には情勢の変化と共に「基本的

には……であるが、今の時点では……」というような「弁証法」を許す空隙が生まれる。それがスターリンを許した。しかしどんな状況でも基本的なものをあくまで追求することにおいて機械論者と非難されるほどあまりにも明晰であったローザの理論は恣意的に変造することがむずかしかった。スターリンはレーニンの後継者であることを称することはできた。しかしローザの理論は抹殺するほかはなかったのである。このことが二人の思想の特色を語っている。そしてスターリン主義の克服が大きな課題として登場している現在においてローザ理論のもつ意味も明らかになるであろう。

とりわけローザがレーニンの組織論にひそむエリート主義、官僚主義を攻撃しつづけたことは、あたかも後のソ連の行方を不吉にも予言していたかのようにみえ、異常な新鮮さをもってわれわれをとらえるのである。

革命は一部の前衛政党や指導者だけのものではなく、労働者階級全体の事業であると考える彼女にとって組織は過程であり、目的であってはならない。革命政党は正しい思想と行動の源泉ではないから、その戦術は大衆運動の経験に学び、それを普遍化することによってのみ得られる。大衆の自発性に依拠し、創造性に信頼する、これが「自然発生論」と非難される彼女の中心思想である。「真に革命的な労働運動のおかすあやまりは、歴史的には、もっともすぐれた中央委員会の完全な正しさよりもどれほど有益であり貴重であるかわからない」（ロシア社会民主党の組織問題）とまで断言したローザはロシア第一革命の中に彼女の思想を裏づける労働者の創造性と理想主義を無数に見出した。その総括としての『大衆ストライキ論』は安保闘争を経たわれわれには思い当ることの多い論文であるが、その現代性は組織官僚主義から解き

放された発想に負うところが大きいだろう。『ロシア革命論』におけるレーニン、トロツキーの徒党政治批判も結局はロシア革命が全人民的革命でなければならないという彼女の根本思想からでている。状況に強いられてその理想が完全に実現しないことを批判するのではない。そのような現実を正当化し、必要悪を善とすることを認めなかったのである。

レーニンとローザの組織論上の対立を、説明するために前者がツァーリズム専制下の後進的状況に適応する理論であり、後者が第二インターの官僚主義が明確になったより西欧的状況に対する理論であるとしばしば言われる。しかし少なくとも組織を精神の問題として考えるローザは自分の理論をそのような特殊状況にだけ対するものとは考えなかったろう。バチスタ専制下のキューバ革命がレーニン的であるよりもはるかに、ローザ的な組織によって進められたことは彼女の理論の普遍性を語っている。

ローザの理論を単なる「誤り」としてしりぞけた人々が、それといっしょに何を失ったかに気づいたであろうか。

彼女の理想主義にまで高められた普遍的な原則性は社会主義の本質としてのヒューマニズムに由来している。それは欺瞞的な抽象的「人道主義」ではない。搾取と圧迫が存在する現代では、被圧迫者との連帯に徹底する以外に人間性を守ることができないことをローザはよく知っていた。しいたげられ、苦しめられたもの——それはすべての生き物に及びさえした——に対する共感が彼女の革命的情熱を支えていた。ローザを捨て去った時、マルクス主義はその生命としての人間性としたがって思想性を失っていったのであった。

以上のような意味での理想主義は、とりわけ第一次大戦以後の晩年の著作にきわだってくる

ように感ぜられる。あの牧歌のような獄中からの手紙はいうまでもないが、『ドイツ社会民主党の危機』の反戦闘争から、『ロシア革命論』をへてドイツ革命に直面した『スパルタクス綱領』『綱領演説』などの激しい政治的文書の中にも美しい思想が泉のようにわきあふれてくる。それを弱さや甘さと考えるべきではないだろう。このような理想を守り、あるいは実現するためにこそ社会主義と革命があるのだから。

こうして、人間の解放としての社会主義を根源から考えようとする人々にとってローザは他に求められない手がかりを与える。少くとも彼女の思想は従来かたずけられてきたような矮小なものではない。

いかなる祭壇にも礼拝せず、師と仰ぐマルクスについてすら自由に批判したローザに権威としての完全性を期待するとしたら失望するだろう。ひとは彼女の理論に不足を指摘することはできる。しかし変革のすべての重みを自分の上に感じ、それをだれよりも自己の問題として解決しようとするものにとって、もっとも主体的な革命家ローザ・ルクセンブルクの存在——その生き方と思想は大きなはげましであるにちがいない。

# I　若きローザの思想と行動

滝田　修

## 1　問題の提起と研究方法

すべて、歴史の核心にふれる思想家というものは、自分の人格の全体を歴史に投げかけ、こうして生ずる歴史との葛藤のなかで、歴史の息吹きを自己の思想のうちにうけとめるものである。しかも、かれの思想は、このようにして歴史的個性を宿すことによって、同時に、普遍的なものに結びつくのである。

たしかに、われわれをとりまく社会的現実は、先人のそれと同じではない。われわれには現代に固有な歴史的状況が迫っているはずであり、したがって異った歴史的課題が与えられているはずである。しかし、われわれと先人の思想家とのあいだには、こうした歴史性の相異をこえた共通の問題がよこたわっていることも事実であろう。われわれは、先人の歩んだ道を追思惟することによって、このような共通の問題を解いてゆくうえでのなんらかの手がかりをつか

制作中

ローザ・ルクセンブルク論集

一九七〇年十二月一日初版発行　著者＝酒井角三郎＝滝田修＝清水多吉＝向山景一＝川田洋＝浜田泰三＝南成四　発行者＝阿由葉茂　発行所＝情況出版株式会社＝東京都新宿区戸塚町三ノ一六〇
電話＝三六八―〇七七〇　振替＝東京一〇六四六四番　印刷所＝三晃印刷株式会社　製本所＝星野製本株式会社　製版所＝誠興社　定価＝九八〇円